

第2回 魅力と活力ある県立高校づくり検討委員会

日 時：平成18年9月8日（金）13：30～16：00

場 所：ホテル白鳥 新館3F 鳳凰の間

教育長挨拶

藤原教育長

第2回の高校づくりの検討委員会ということでございますが、新年度になりましてからは初めての会議でありまして、この4月に教育長に就任いたしました藤原でございます。どうかよろしく願いいたします。

名簿を拝見いたしますと、既知の方が何人かいらっしゃいまして、こういう形でまた一緒に仕事をさせていただけるという思いがしております。

御案内のとおり、生徒数の減少が今後も続くということで、残念ながら従来のような規模で県立高校を維持していくということが難しい中で、生徒たちにとってどうしたら良い教育環境がつくっていただけるのか、あるいは子供の自立した人格形成にどうしたら一番有効かというようなことについて、皆さん方の意見を拝聴しながら結論づけていくためのこの委員会であると解釈しております。

より良い高校づくりのため、共同作業をさせていただきたいと思っております。どうかよろしく願いいたします。

会長挨拶

井上会長

今年3月に、我々、諮問を受けたわけでありまして。現在の県立学校再編成基本計画というのは、平成11年度から20年度までですが、その後を受けて、平成21年度から今の教育長のお話にありました環境の変化、特に生徒数の減少の中で、教育の質を維持し高め、時代の変化に適応し、あるいはその要請に応えていく魅力と活力ある県立高校づくりということについて、広く考えなさいということです。

本日が2回目の検討委員会になるわけですが、この間、県内の幾つかの高校を訪問して、いろいろお話を聞かせていただける機会を得ました。私自身は8つぐらいの高校を訪問させていただきました。私も過去に東京方面で多少高校の関係の勉強をしたことがありましたが、その時代に比べますとどの高校も工夫して新しい時代の課題に取り組んでいると感じました。普通高校でのスーパーサイエンスハイスクールという新たな試み、専門高校で

は例えば農林高校での狭義の農業だけではなくて、福祉系の学習も行われているというように、時代の変化に対応した取り組みがなされています。

何よりも少子化の進展に伴い生徒数が減る中で、どのようにしたら教育の質が維持できるのか。

また、時代の要請としてみると21世紀知識基盤型社会と言われるように、生涯にわたって学習をし、時代の変化や社会経済の構造変化に適応した思考力や学習態度を学校教育を含めてどのようにしたら身につけることができるのか、大学を含めて高等教育というのはユニバーサル段階という言葉を使うようであります。

つまり一時代前ですと、大学というのはエリートの養成学校だったわけですが、私どものころから次第にマス化が進み、高等教育のマスプロ段階というのに到達したところから、専門学校を含めて高等教育を何らかの形で受けると、一旦、就職して10年か20年働いて、もう一回、高等教育を受け直すということを含めて高等教育のユニバーサル段階に達した中で、高校のあり方というのはどのように位置づければ良いのか。

さらに、私ども大学から見ますと、本当に高校までで基礎学力が身につけてるのだろうか、学力低下というような話がありますけれども、幾分そういうことについての問題意識も持っていかざるを得ないわけであります。

諸環境が変化する中で、現代的な知識基盤型社会に適合した広い意味での人材を育成していくというときに、島根県は島根県なりの、また独自の課題があります。何よりもこれからはばらばらの間、生徒数が非常に激しい勢いで減ると、そのときにどのような高校のあり方を考えるのか。一つの高校に教職員がいつもいて、クラスがあるという時代から、いわばモビリティーな時代、かなり移動が激しい、動く、その中でいかにして質の高い高校教育を維持するのかということを考えていかなければならないわけであります。

そのようなことをここで積み上げ、議論をして、来年度中のどこかの段階までにある程度めどをつけていかなければならないわけでありまして、広く皆さん方の意見を募り、この会の題、つまり魅力と活力ある県立高校づくりということについて皆さんのお知恵をおかりして、切磋琢磨して、より良い答申が出せますように努めていきたいと思っておりますので、御協力のほどよろしく申し上げます。

出席者確認

事務局

本日の出席者は、会議次第の2ページと3ページをご覧ください。

吉迫委員と中川委員が所用のため欠席。18名出席。

事務局説明

議長

本日の審議内容や資料について、事務局から説明してください。

事務局

審議内容と資料は会議次第のとおりです。

議事

議長

それでは、議事に入ります。

議題1の関連事項の状況説明のうち、学力向上に関する取り組みについて、義務教育課から説明してください。

義務教育課

本年5月上旬に実施した島根県学力調査の概要について、簡単に説明します。

この調査は、平成16年1月に、中学校3年生、小学校6年生を対象に、全県の20%の児童生徒を抽出して行った調査とほぼ同様のものであり、調査から3年が経過し、これまで行ってきた様々な事業や施策、あるいは学校の取り組みを検証するということで実施しました。

2点目に、この調査はしまね学力向上プロジェクトの一環として行ったもので、資料1-2の最初の四角囲みのとおり小・中学校においては、平成16年1月の調査で様々な課題が判明してきました。例えば全国に比べて家庭学習時間が少ないこと、数学の理解度に個人差が大きいこと、また高等学校においては、高校入学時の学力が年々低下する傾向にあること、加えて勉強の仕方がわからない生徒が増加していること、そうしたことが大学入試、資格取得等に影響してきていること。そのような背景から、児童生徒の義務教育段階における学力を客観的に把握し、その対策をいかにやっていくかというプロジェクトのスタートがこの学力調査です。

3点目に、市町村教育委員会においても、この調査をぜひ県と一緒に実施したいという要望があり、1年かけて協議をし、共同で実施したものです。

この調査は教科に関する調査と意識調査の2つから成り立っており、対象学年は、小学校3年生から中学校3年生までの7学年、教科に関する調査は小学校3、4年が国語、算数、小学校5、6年生と中学校1年生が社会と理科を加えた4教科、中学校2年と3年は

さらに英語を加えた5教科、意識調査はすべての学年で実施しました。

以下、教科に関する調査結果の概要について、資料1-1のP.9までを用い説明

次に、意識調査は、資料1-1の16ページの一覧表の設問項目について、アンケート方式で実施しました。回答は、とてもそう思う、まあそう思う、余りそう思わない、全くそう思わないという4区分の中から選択する方法です。なお、一覧表の右側のA-C15以上とは、教科に関する調査の到達度から島根県全体の集団を上位、中位、下位の3層に分けた上で、上位がA層、中位がB層、下位をC層とし、A層の肯定的な回答とC層の肯定的な回答の割合を引いたものが15%以上ということです。15%の根拠はここでは割愛しますが、学力との関連が非常に高い質問項目です。該当する項目が網掛けになっていますが、この部分が特に課題と考えられる項目です。

以下、意識調査結果の概要について、資料1-1のP.10からP.16までを用い説明

この調査結果を、今後、各学校の指導改善あるいは県の学力向上対策事業に生かしていくとともに、さらに詳細な分析を行っていきたいと思います。なお、ベネッセコーポレーションが実施している全国的な調査の結果との比較など、さらに分析したものをまとめて10月末に発表する予定です。

最後に、この調査でいう学力とはいわゆる紙ベースではかれる学力であり、学力の概念の一部であるということを申し添えます。

議長

引き続き高校教育課から説明してください。

高校教育課

しまね学力向上プロジェクトのうち、高校サイドで取り組んでいることに絞り、資料1-2を用いて説明します。

この学力向上プロジェクトが始まった経緯は、先ほど義務教育課から説明したとおりですが、高校の現場でも、入学してきた1年生の基礎力がついていないのではないかと、あるいは学習時間も調べてみると随分減少してきている、7月の模擬試験をみると全国の偏差値に比較して下がってきてる、こうした現象がささやかれていました。

平成17年の2月議会でのセンター試験云々のことから始まり、我々としても調査を行うべきではないかということで、17年度にプロジェクトを立ち上げ、予算のない中でもできることをやろうということで、資料の事業内容の(1)学力の把握、分析と周知、啓発の高等学校に記載しているとおり、学力に関する状況調査を行いました。4月、5月に各学校が学力実態をどのように把握をしているか、あわせてそれに対する対策をどのように行っているかということをも文書調査したうえで、すべての高校を訪問し、各学校が把握

している生徒の学力に対する実態を調査しました。

その結果、やはり基礎力が不足していることが浮き彫りになりました。例えば漢字にしても非常に書けなくなっている、あるいは数学の簡単な数式の問題が解けない、あるいは英単語の量についても非常に減ってきているというようなことがわかってきました。

各高校での対策については、資料には記載していませんが、17年度の取り組みとしては、普通高、専門高校で違いはありますが、共通しているのは早く高校の授業になれるように4月のところで工夫をする。例えば高校の一日の生活というのはこういうものですよ、勉強の仕方というのはこういうことですよというようなことを理解させるために、長い学校では1週間ぐらいかけて、生活習慣を身に付けさせていく。あるいは学校によっては、中学校の教科書からのつなぎ教材をつくって、教科によっては1学期間かけてつなぎ教材でやっていくというような取り組みを行っています。

また、高校側の問題として、生徒をきちっと把握した上で授業をやらなければならないわけですが、そこら辺りがおろそかになっていたのではないかとということで、校内で授業公開を行い、普段の授業をお互いに見るといような取り組みを始めている学校がかなりあます。このように状況調査をしたものを学力向上対策リストとして校長会で配付し、他校の取り組みも参考にしながら各学校で独自のものをつくるように指導しました。

今年度に入り、高校関係では、資料下段に記載している学力向上フォーラム、学力向上対策リスト、学力向上パイオニアスクール、リーダーセミナー、授業力向上セミナー、予備校研修プログラムへの教員派遣の6本の施策を行っています。

学力向上対策リストについては、昨年度と同様の取組を行っています。先月18日に開催した学力向上フォーラムで今年度の取り組み状況をまとめたものを各学校に配付して、参考にするように指導しました。

学力向上パイオニアスクールは、松江南高校、出雲高校、益田高校の3校を指定し、できるだけ他校の参考になる学力向上の取り組みをとということで取り組んでいます。松江南高校では島根大学あるいは保護者との連携をとりながら、補習授業においてどのように連携していけるかということを中心に研究しています。出雲高校では、昨年度から授業評価を取り入れており、すべての授業について生徒から評価を受け、それを教員が自分のものとして生徒の授業に還元していくという取り組みをしていますが、それを徹底した形でできないかということの研究をしています。益田高校では、もう一度進路指導全体を見直しながら、学校としてのきちとしたシステムをつくるということの研究をしています。このような学力向上パイオニアスクールの取り組みを学力向上フォーラムで発表し、他校もそれを参考にして各校の取り組みに反映していくように指導しています。

学力向上フォーラムでは、県下の県立高校が集まり、学力向上対策リストや学力向上パイオニアスクールの取組状況の発表や先進的な取り組みについての外部講師による講演を行いました。

リーダーセミナー、授業力向上セミナー、予備校研修プログラムへの教員派遣はこれから実施するものもあります。リーダーセミナーでは、普通高校23校の教員を対象として、教科はもちろんですが、学校として有効なシステム、マネジメント力等を身につけることを目的として11月に開催予定です。

授業力向上セミナーでは、教員経験12年から20年の中学校及び高校の全教員を対象として、今年から3年間かけて、全教科について研修を行う予定です。

予備校研修プログラムの教員派遣では、進学についてはかなり高度な授業技術等を持っている予備校に、5教科で各3名の高校教員を夏に派遣しました。冬休みにもう一度派遣をする予定です。

議長

質問を受けます。

委員

小・中の各教科の意識調査の概要を見て気になったのが、達成率を70%と設定して、それを超えていたらおおむね良好という表現をされましたが、今、小・中で、特に問題になっているのが格差があるということです。上と下の差が激しい、中間が少ないというような現状が問題になっていまして、平均で70を超えていてもおおむね良好であるという部分は良いのですが、格差の大きい、点数の低い部分が人数的にかなり多いのであれば、やはりそこも問題点として認識すべきではないかと思います。10月にまとめを出すときに、そういう部分も解説とか分析が出されるのか。

義務教育課

御指摘の点については、全くそのとおりであり、いわゆる平均とか1つの数値のみでその結果を見ていくということは、一面的な見方しかできません。集団全体をいろいろな角度から捉えていくことも必要であり、中でも御指摘のあった子供たちの状況が全体としてどうなっているのかという点については、普通のテストで点数に当たる到達度がどのような分布状況になっているのかということも、既に分析の中で幾つか触れています。

ほぼどの学年もどの教科も、いわゆる分布グラフという形で到達度をグラフ化していくと、おおよそ右肩上がりのグラフになっていますが、中学校3年生の英語については、その右肩上がりがなだらかな台形型の分布状況になっており、到達度の低い子供たちもかなりいたということが結果として出ています。中学校3年生の数学でも同じような結果が出

ており、これは前回調査でも同様の結果が出ていますが、個人差が広がってるということです。これに関しても全国値が出たときに、さらに分析ができると考えています。

委員

先ほどの意見と同じですが、私の記憶が間違っているかもしれませんが、小学校で1,006文字ぐらい漢字があると思いますが、バブル前の文科省のデータだと、読みが100パーセントで、書きが95パーセントぐらいあったはずですが、それが最近、読みが90数パーセントになっていますね、書きはさらにひどいですね。日本国民が日本国の基礎漢字を70パーセントでおおむね良好とか、そんな評価は理解できないですね。ですから、そのおおむねというような数字ではなく、達成基準をちゃんと持つことが必要だと思います。

その中で、例えば小学校とか中学校で1年生のときは高いけど、3年生のときは落ちてしまうとか。当然、受験があるわけですから1年のとき低いけど3年で上がればいいわけです。数字というものはただ単にスポットで捉えるのではなくて、1年のとき低くても中学3年、特に高校3年のときの偏差値が上がればいいわけです。ですから右肩上がりになればいいわけであって、落ちるのは良くないわけですね。その辺りを、その仕組みを変えないと、いろんな方法論はあるんですけどもハウツーがちょっと多いのではないかと思います。物事が達成するのはハウツーではなく、ワットです。何がしたいのだと、偏差値を上げたいのですかと。中高一貫教育をやってますよね。その中で、特にエリート校をつくるにはイギリス型で、偏差値ばかりじゃなくて修身の勉強、学習態度とか、そういったものも鍛えますとか、私は島根県は何をするのかというのを明確にすべきじゃないかと思えます。とりあえずいろんな講師を呼んで、ハウツーはいいんですけど、何をしたいんだと。

議長

不登校率が低いということ。島根県は不登校率が低いと聞いてますが。

委員

島根県の不登校の状況は最悪です。ですから、そういう認識の間違いが良くないと思います。高校もそう良くないし、教員の不登校もあるんでしょ、中には。やっぱりある程度きちっと現実をわきまえて、何をしなければいけないのか。そういうワットをきちっとつくるために、我々がここで話し合う。もちろん産業界としても優秀な人たちが高校を出て、大学を出て、できたら島根県で働いてほしいわけですから、その辺りをもう少し明確に知りたいというのがあります。やっぱり仕組みだと思います。昔はたしか義務教育と高校教育を一括、一気通貫でやってたのが、今、義務教育課と高校教育課に分かれたため、その

中での歪みもあるのではないですか。だからそういうような自らのきちっとしたレビューもあわせていただきたいと思います。ちょっと厳しいかもしれませんが、現実の県の教育、教育は百年の計ですから。

私はこっちへ帰って20年会社をやっていますが、東京にいたときもアメリカにいたときも、特に神戸へ帰ったとき、必ず聞かれるんですよね。島根県のあの投票率、何ですか、すごいですねと。当時たしか島根県の進学率や偏差値も高かったと聞いています。ですから学力のリテラシーの高さと選挙投票率は、意思の中でできるものですから、別に財政力がなくてもできるわけです。やはり教育というのはそういうものだと思います。その辺りがある程度、行政としてしっかりした形で引っ張って行って、その中で産、学もやれって言えばそれやる話です。

ちょっと話が大きくなったかもしれませんが、その辺りぜひきちっとした認識をいただきたいと思います。

議長

私が聞いていたのと話が逆のようでありまして、その辺りをこの学力向上にかかわる計画、今後の取り組みプランにどのように生かしていくかという重要な論点だと思います。

委員

学力調査結果のフィードバックについてですが、今回の学力調査は普通のテストと形式が違うので、それを返して児童生徒の個別指導や保護者への周知、啓発に役立てるためには、それなりのノウハウがないと成果が出ないと思います。教育委員会の方である程度資料を出して、あとはそれぞれの学校が工夫をして個別指導に役立てていただくのか、あるいは、教育委員会の方である程度で踏み込んでそういう指導もされるのかどうか。

義務教育課

この調査につきましては、それをどう今後の学校や子供たちの改善に役立てていくのかということが、一番重要なことであると思います。

そのため、7月の末から8月上旬にかけて、調査結果の説明会を県内5会場、各教育事務所単位で実施しました。調査結果は学校によっては五、六百ページぐらいの分厚い冊子になって各学校に届いています。説明会では、この膨大なデータをどう子供たちの指導改善に役立てていくのかという、その結果の読み取り方、分析の仕方等を一日かけてともに一緒に勉強し、かつ、各学校の教員が、ここがうちの学校の課題だな、ここを何とか改善していかないといけないなという、そういったことの演習的なものも実施しました。

そうしたことをもとに、各学校で夏休みの間に研修会を開き、自分の学校のデータの分析、そして課題の明確化、対策へとつなげていくような、事業展開を今、行っているところ

るです。9月には、各学校のリーダー1名ずつを対象に、その後の授業改善をどうしていくかという演習も一日かけて実施する予定です。

委員

1つ目は、この学力調査で記述式の問題において無回答率が高いということをどのように考えているのか。

2つ目は、高校の方ですけれどもセンター試験で英語のヒアリングの入試が始まりましたが、県としては何か包括的な対策というか指導を行っておられるのか、それとも各高校のカリキュラムに任せておられるのか。

コメントとして、この資料の1 - 2にあるようなしまね学力向上プロジェクトの概要は、大体大まかなところは広報されていますが、結果説明会など、ある程度は保護者にも公開して、子供がこういう試験を受けてきたということの子供や先生から聞いて知っていても、その結果が模試のように返ってきただけでは、保護者は何にも知り得ないということもありますので、保護者としても知る権利もありますし、知って、何かもう一度学校や県の方にもフィードバックできるのではないかと思います。

義務教育課

書く力、記述のところです。これについては学校の授業での指導、やはりきちんと記述したり書いて自分の考えをまとめて発表するとか、あるいはレポートにまとめるとか、そうした活動を今後重視していかないといけないということを痛感しています。

また、保護者への説明につきましては、各学校で必ず三者面談あるいは個人面談を通して、保護者に伝えてほしいということは繰り返し指導していますが、まだ不十分な点もあるかと思しますので、意見を参考として今後の改善に生かしていきたいと考えています。

高校教育課

英語のヒアリングについては、県として今包括的な指導というのは特に行っていません。各高校で対応しています。

委員

高校や大学に進学するときに下がっているという現象には、いろいろな原因があると思いますが、この問題を学校として一番重視していくべきではないかと思えます。

分析方法として、違う視点から見ることも必要で、その道の専門家に見てもらおうと、内包してる問題が明らかになってくるのではないかと思えます。

私は親として経験者です。高校の三者面談の際、子供の希望校について、先生からとても行ける場所ではありませんと言われました。高校入学後に成績が随分下がっていましたから。そのときから私はなぜなのかという疑問をずっと抱いていて、今日、アンケート

を見たものですから、子供たちにとって非常に重要な視点を何か見逃してはいないかということと違った分析方法で分析してみることも必要ではないかと思いました。

委員

高校へ入ったら成績が下がっているという話ですが、高校側はそう思っていないのですが、どこのどういうデータで高校に入って学力が落ちるとということなのでしょう。高校では1年生のときに3カ月かけて中学校の総復習から始めます。英語の辞書を使うんですかという質問から始まります。現実の高校教育は、そこから始めているのです。高校側の分析では、高校に入ってからよくぞ伸びてくれたと思っています。

今、県教育委員会で取り組んでおられる学力向上プロジェクトについて言えば、小学校3年生はあと10年ぐらい経たないと高校に来ないわけです。私たちは、今年、来年と課題を抱えているわけです。生徒たちの進路希望に応えなければならない。3年、4年が実は待てないぐらい高校は今困っています。このことを御承知おきいただいて、この会を進めていただきたいと思っています。

議長

次に、県立高校の通学区域と 県立高校卒業者の進路状況について、事務局から説明してください。

事務局

県立高等学校の通学区域については、検討委員会で1年間検討いただき、7月31日に最終答申をいただきました。

通学区域のあり方について最終答申の22ページをご覧ください。現在の学区図を見ながら現在の学区と、答申内容のポイントについて説明します。

以下、通学区域の最終答申のP.22からP.25の現在の学区図とP.2からP.6の学区毎の改善の方向について説明

この答申を踏まえて、今後、県教委で具体的な学区の実施案について検討することとしています。

事務局

県立高校卒業者の進路状況について資料2により説明します。この資料は今年5月に高校教育課から各高校に対して行った調査のデータから作成したものです。

まず1ページについて、特徴的なところとして、高校からの進学率については非常に高く75%を超えています。その中で、進学よりも就職の割合が高いのは、工業高校、水産高校です。特に工業高校の就職率については非常に高く約64%になっています。

2ページについて、全体的に見ると、東部に比べ西部の方が県外への割合が多くなって

います。

3ページ、4ページについて、特徴的なところとして、普通高校は4年制大学の割合が非常に高く、併設高校は、大学等への割合と各種学校の割合がほぼ同数。専門高校は、各種・専修・専門学校への進学割合というのが非常に高くなっています。

5ページ、6ページについて、全校種で見ると、生産工程、労務作業者が一番多く約50%となっています。特徴的なところとして他に挙げられるものとしては、工業高校については、生産工程、労務作業者の割合が特に高く80%となっています。また、商業高校については、事務従事者の割合が高く、30%を超えています。

9ページ、10ページについて、特徴的なところとして、雲南、飯石、仁多と隠岐地域では、サービス職業従事者の割合が非常に高くなっています。それから、益田、鹿足地域では特に生産工程、労務作業の割合が66%と、特に高い割合を示しています。

議長

質問はありませんか。(なし)

〔休憩〕

議長

再開します。

議論の続きということでもありますが、私が高校を視察したときに不登校の説明を聞いていたのと、多少違う話があったので、事務局から不登校の状況について概要を説明してください。

事務局

小・中学校については、いわゆる不登校の率は全国で最も悪いということになっております。特に中学校が深刻な状況にあり、その対応を検討しているところです。不登校の理由としては、友人関係、学業の不振、親子関係といったところが特に多く、その他本人にかかわる問題ということで、これにはいろんな事情があるかと思っております。

会長が不登校の率が低いという発言をされたのは、高校を視察した際に、高校の方は少ないという説明したのを受けての発言だったと思います。平成17年度の高校の数値は、まだ文部科学省から正式な数値が発表されていませんが、平成16年度の数値では、全国が1.9に対して本県が1.4となっています。全国でどのぐらいの順位かということについてはわかりませんが、そうしたことから高校の方は低いということで、視察した各高校がそのように説明したということです。

議長

高校を視察した際には、自分の高校では中学校までは不登校でも高校に入ると不登校で

なくなるというような説明がありましたが、それはある程度正しかったようです。いずれにしても、小・中から高校に入ってきて、それから大学に行くということになるわけですから、総合的な視野から正確に把握しながら考えていく必要があると思います。

それでは次に議題（２）の専門部会の委員について、事務局から説明をしてください。

事務局

検討委員会設置要綱の第６条の規定に基づき設置することになっている専門部会の委員について、資料３のとおり選任しましたので、報告します。

なお、専門部会は、各学科等の専門的な事項について調査研究する目的で設置をしています。専門部会の審議経過については、随時、報告する予定です。

議長

ただいまの説明に何か質問はありませんか。よろしいですね。

次に、議題（３）ですが、６月から７月の間で学校視察を実施しましたが、視察を踏まえて感じたことなど、委員の皆さんがお考えになっていること何でも結構ですので発言していただいて意見交換をしたいと思います。

委員

せっかく高校訪問するのですから、何か一つのテーマを持ちながらということを考えているとき、たまたま米子の町を車で走っておりまして、昼どきではありましたが、天候が悪いにもかかわらず、店の外に人がずらっと並んでいました。この天候が悪いのになぜだろうかと、店は何かというラーメン屋さんでした。恐らくそのラーメン屋さんには毎日のように人が並んでいると思うのですが、なぜあんなに人が並ぶのだろうかというように思ったのです。ほかのラーメン屋さんも一生懸命お客を集めるために努力をしているだろう、にもかかわらず、なぜあんなに差がつくのだろうか。たまたま知ってる人がその店に行ったことがあるというので聞いてみたら、さほど味に変わりはないと言う、まずくはないと思うのですけど。というようなことを聞き、みんな同じように努力をしているのに、なぜそういう差ができるのだろうかというような視点で、学校訪問したいと思って視察したのですが、十分な時間がなかったものですから、得たものが正確かどうかわかりませんが、いろいろ感じたことがあるので、ポイントだけを言いますと、各学校とも校長先生はじめ皆さん一生懸命やっておられることは間違いのないのです。いいことは言いません、当たり前のことですから。あまり良くないと感じたこととして、まず校長先生の方針や目標はあるのですが、一部の先生に校長先生が今一番力を入れておられることは何でしょうかという質問をしたときに、ずばっと答えられる先生が少なかったこと。ということは、方針が徹底されていないのではないかということを感じました。

それから、保護者と学校の関係、どのようにして結びついていきますかということについては、こういう便りを出しています、こういうメモを出していますということでしたが、それに対してどういう反応を求め、どういう結びつきをしてるかという努力が見えなかったというように感じました。

それから、前回も言いましたけれども、方針とか目標に対しての進捗状況の把握が無視されてる部分があったなということです。

それから、強烈に感じましたのは、普通高校と専門高校の生徒の違いです。生徒何名かと対話もしましたが、生徒といいましても選ばれた生徒が出ていますから、それをもってすべてを判断するわけにはいかないのですが、専門高校の生徒の方が目に輝きがあるというように感じました。そして朝、学校へ行くときに1つの目標を持っていると、きょう学校へ行ったらどういう牛を世話しようとか、どういうヨーグルトをつくろうとか、どういう植物に水やろうとか、まあ一例ですけども、そういう目標を持って出ているということを感じました。したがって、普通高校の場合であっても生徒それぞれにそういう目標、それぞれに合った目標を持たせて、朝、学校へ出てこいよというような仕向け方をしたら、目の色が違ってくるのではなかろうかというようなことを感じました。

それから、私も企業をやっております者の目から見まして、整理整頓とか清掃とかというものがありますけれども、整理整頓してます、清掃してますというように言われましても不十分だと感じました。基準が設けてない、ここまでやったら整理整頓ができてい、ここまでやったら清掃できているというものがあって、それを目標にしてみんなでやろうじゃないかというものではなくて、ただ漠然と清掃しよう、整頓しようという傾向があるのではないかと感じました。整理整頓を例えとして言いましたが、全般的にそのような傾向があるのではないかと受けとめました。

それから、授業の参観もしましたが、これは我々のときも同じですが、聞こえても聞こえなくても関係なしというのが結構生徒の中にありました。それから先生が話していても、生徒がボールペンをくるくるくるくる指先で回して、実に上手なんですね。あれ朝から晩までやってなきゃ、ああはできないだろうと思うぐらい、もうくるくるくる回してるんですが、あの辺りはちょっとどうか、会社へ来てやられたら困るなと思いました。それから習字の時間がありました、書道。あの筆の持ち方。我々のときは筆の持ち方から教えられたものですが、持ち方を恐らく教えられないのであろう、最後まで、という印象を受けたような次第です。

それから、最後に廊下を歩いていますと生徒たちがあいさつをしてくれます。大きな声でどこへ行ってもしてくれます。あのあいさつはなぜするんですかと、なぜあいさつをし

なければいけないかということをおっしゃっているのですかと質問しましたが、私としては満足な回答が得られなかったのです。私はそれなりのものを持ってるんですが、もっと的確な指導がしてあげればと感じました。

委員

私は、主として専門高校、それから中高一貫教育を実施している飯南高校を視察しました。私の地元の高校は普通科と農業科の併設校ですが、先ほど話しがあったように、その地元の高校を見ましても普通科よりは専門科の方が子供たちの目の輝きが格段に違うと感じています。活力が非常にあるということで、魅力ある高校づくりのキーポイントは専門高校にあるのかなと思いながら視察しましたが、やはり思ったとおり非常に活力のある教育環境を見ることができました。

先ほど校長先生に一番力を入れていることは何ですかと聞いても、なかなか返事が返ってこないという話がありましたが、専門高校の校長先生方は、しっかりした信念を持ち、とにかく地元の企業が求める人材を育てるのが自分たちの任務である、そうでなければ、ここに高校がある意味がないとの説明もありました。そういう意味でやはり地元にとって高校が果たすべき役割、任務、そのようなものを非常に強く感じました。

先ほど学区のあり方についての説明等もあり、やがて学区についてはある程度廃止の方向で動いていこうという説明がありましたが、専門高校を視察する中で、元気のいい生徒を迎える教育環境として、もう少し何とかならないものかなと感じたことがあります。それは寮のことです。普通高校に比べて専門高校は点在していますので、当然、通学距離も遠くなり、通学できない生徒については寮を利用することになりますが、その寮の運営について、この学区とあわせてぜひ検討していかなければならない一つの大切な教育環境ではないかということを感じました。特に水産高校につきましては浜田と隠岐にしかないわけですので、かなりの人数が寮生活ということになるわけで、そういう意味でもっと私たちは目を配っていかなければいけないということを感じました。

委員

私は意見というより、教育委員会と各学校との関係について質問したいのですが、例えば適切かどうかわかりませんが、私の感覚では、例えば企業では教育委員会が本社であって、各学校は支店であるとか営業所だと思うのです。学校視察をしてみて、何か教育委員会と各学校に溝というと語弊がありますが、距離があるのかなという印象を持ちました。

魅力づくりにあたって、例えば教育委員会が方針を出しても、それを現場でどう生かすかというときには、教育委員会と学校の間をどのように考えるか、例えば一つの例でいえば教育委員会がこういう方針を出したら、それに従って各学校もそれぞれ地域性あるい

は校種、例えば普通高校とか、専門高校によってその方針をより具現化するという、言ってみればトップダウン的な形と、一方である程度のアウトラインを示したら、あとは現場に任せてという形で、現場で出したものを教育委員会が吸い上げてボトムアップといえますか、もちろんこれどちらか一方では当然だめなわけで、双方向があるのが普通だと思いますが、その辺りちょっと漠然としている質問かもしれませんが、教育委員会と各学校の関係がどうなのかということを感じましたので、質問します。

事務局

県の教育委員会と県立学校というのは一体のものであり、県立学校長というのは出先の長であるわけです。したがって、校長は県教委の方針にそって学校経営を行うということが基本です。ただ、大規模・中規模・小規模校、沿線部・中山間地域、普通高校、専門高校、特殊教育諸学校、それぞれ課題が様々で、スピード感を持って各学校の個別の問題に対応しなければなりません。それに対して、県教委が的確に方針を出しているのかということについては、十分対応できていないのではないかという課題意識を強く感じています。

委員

他県の高校を視察したときに、ある校長から、それぞれの高校の特色を出すのだと、特色の度合いによって生徒が集まるのだと聞いたことがあります。ですから、企業もまずビジョンありきなのです。トップのビジョンがあって、それをきちんと浸透させる。そのビジョンというのは難しいものではなく、わかりやすいとかおもしろいとか、そういうものでないといけないというのはそのとおりなのです。ですから、しっかりしたビジョンを持った校長というのは、常に主権在民、つまり生徒にとって良いことだろうかという判断をする校長であると思います。

コンピューターの世界でいうとオペレーティングシステムが教育委員会で、高校はアプリケーションに例えられると思いますから、その中でそれぞれの色があって良いと思います。そのこと関してはうまくいってるような、悪くはないと思います。

松江東高校のスーパーサイエンスハイスクールの取り組みも視察しましたが、高校生たちは良い子がたくさんいます。まだ18歳とか未成年だからといって彼らをつぶしてはいけないと思うのです。特に田舎の社会というのは、どうしても若者たちの価値を認めないというような風土がありますから、ですから新しい人たちの意見とか若者たちの意見とか彼らの主体性というものを認めていくような風土というのをつくらなければいけないと思います。その辺りのものも含むオペレーティングシステムをつくってほしいというような気がします。

民間企業で退職者が増えています、フリーターとか。その理由は給料ではないのです。

その風土といえますか、企業風土とか人間関係が6割、7割あるのです。不登校もその理由に、人間関係があるので同じだと思ったのですが、人間関係の元を引っ張り出していくと、校長のビジョンから来て、それを受ける先生たちの一体感とか使命感とか、そうしたものが浸透していくと風土が良くなってきて不登校がなくなる。非常に唯心論的な世界なので大変だと思いますが、日本はそのようなレベルに来てると思います。

アメリカの教育というのは実践教育ですから、高校を出たらみんなお金を、働くための非常に実務的なプラクティカルな教育ですが、日本は明治以降ずっとどちらかというと修身です。仏教用語で娑婆と言います、現世のことを娑婆と言うのですが、サンスクリット語でこれは忍耐という意味です。みんな自分を忍耐、抑えなければいけないという精神があるわけです。自分だけが一人で生きているのではない、生かされていると、宗教観というのは問題あるかもしれませんが、そのようなレベルが要求されていると思います。

したがって、特に小・中・高とか、意外と難しいのは中学だと思います。小学生はどちらかというとまだオリエンテーリングで、高校というのは進路とか方向がはっきりしてまですし。ですから高校はそういう中学校からどういう形でバトンタッチしていくのか、一つのきちとした階段をつくっていくならば、当然、組織も一つであるということを経験して話したとおりなのですが、仮にこの検討委員会で、ある程度そういう答申ができるということであるならば、そうした根っこの部分を議論する必要があります。

我々企業経営者とか財界は、そういう組織論に関してはいろいろな経験をしていますから、その辺りをこの検討委員会で少しでも反映させていただければうれしいと思います。

委員

1点目は、私は、全国のいろいろな自治体の仕事に関わっていて、今、他県のある自治体の政策評価という仕事に関わっています。自治体が行っている政策について1年に1回、その政策評価を住民全体に知らせるということです。これは情報公開を徹底してやろうということで、こういう政策をつくりました、こういう予算をつけました、行政はこうやりますと、しかし、ここまでしかできませんでした、ここにネックがありました、ここで課題にぶち当たりましたというようなことを、各部長がすべて書いたものを毎年出そうということになりました。

結果どうということになったかといえますと、住民から行政が努力していることはわかりましたと、私たちにできることはないでしょうかという話が来たのです。この話が、政策評価を情報公開したときの一番の成果だったと私は思っています。したがって、先生や生徒さんだけがああだこうだということではなくて、保護者や地域住民が、私たちができることは何でしょうかという参加の仕方、よく産学官が連携して何かやろうというのがあり

ますが、子供の教育において保護者とか地域住民が連携してどう考えるかということも大切なことではないかと思っています。

2点目は、子供たちに目標を持つということを行います。目標のない人生なんて、それでは何も到達できないから、我々目的を持って生きることが必要だよと。しかし、目的が自分の周りで見当たらない人たちがたくさんいると思うのです。そのために、私は地方にあって地域に貢献している人がいる、こういうことをやって地域をこうやった人がいる、そういう、言ってみれば良い事例を集めて、子供たちが将来を考えるときに、そんなことを見ることも大切だろうと思います。

私は地元地元にはと言いませんが、地元においても可能性がどれだけ高められるかということをも事例も含めて紹介する、そして自分たちもそれに対して目標を持ったり勇気を持ったりしていけるような、そういう教育周辺の環境というものを社会人がつくっていくこともできるのではないかと思っています。

同じようなことで、島根県吉田村では、たたら製鉄のことをやっていて、鉄の歴史村という主要プロジェクトを20年間やってきました。今、イギリスの世界遺産になったアイアンブリッジ、鉄の山地ですけども、そこの文化比較を今、東京大学と一緒に研究しています。要するに私たちの持つ地域資源を東大の博士課程の学生たちが関心を持って、一緒にイギリスの調査に行ったり、吉田村の調査をしています。素材が周辺にあるということも、大切なことではないかなと思っています。もし私たちが学校の子供たちに対して、周辺の何かを与えることができるとするならば、そういう可能性を発見する、目的の持つ何かそういう場をつくることができたらと思っています。

委員

この会の冒頭に5月に実施された学力調査の説明がありました。私は最近、島根の教育のキーワードは到達度と聞いていて、今、島根県の教員の到達度というものが下がっているのではないかと感じています。目標値が高ければ、今回の学力試験をもう少し徹底的に分析することができると思っています。この目標値が高くないと分析はあいまいでもそれでいいというところがあるのではないかと。今度の調査をどのように分析していくか、今後の発展につながる分析でなければいけないと思っていますが、その辺りに到達度の問題があるのではないかと思います。

それから、小・中学校の授業を見ていて、授業をカットすることに対する罪悪意識があまりないというように感じています。要するに1時間の授業に対する大切さというものが希薄になっている、怠けてるかということそうではなくて、到達度が低ければカットすることに対して希薄になっていくわけで、到達度が高ければカットされたら困るわけです。

ですから、生徒に1回説明してそれでよしとする教師と、そうではない教師との到達度の問題があると思います。

我々は、これから魅力と活力のある県立学校づくりということを考えるわけですが、魅力と活力というものは個々の教員の到達度というものが高くないと絶対に出てこないと思っていて、いずれにしても学力の問題、魅力、活力、いろんなところに、もちろん施策も大切ですが、個々の目標値というか、先ほどの掃除のことでもそうなのですが、どこまでやればそれをよしとするのかというところがあります。到達度が幾分下がっているのではないかということが、これからの進め方において、一つのキーワードになるのではないかなというように考えています。

委員

私は学校視察に1日だけしか行っていませんが、送ってもらった資料を見たりして、それぞれの学校が一生懸命取り組んでいるということが伝わってきました。

私は委員になってから、活力があるというのはどういうことか、魅力があるというのはどういうことか、とずっと考えていますが、それは高校生にとってどうなのかということを考えていかないといけないと思いき、高校を卒業した学生たちのほんの一部ですが、魅力ある高校とはどういうことだと思いますかと質問してみました。答としては良い先生とか好きになれる先生とか、一人一人と向き合ってくれる先生がいるというのが一番多かったです。それから授業のわかりやすい先生しかいないところとか、具体的に高校名を答えた人もいましたが、学業と部活が両立できるということが一番でした。また、地域と一緒にいろいろな活動ができるということもすごく魅力に感じているということがありました。その点から見ると、先生方が努力をしておられるなということがわかりました。

議長

高校も地域との関係、いろいろ工夫しているところも出始めている。今、大学と地域、あるいは高校、中学と地域関係をどのようにつくっていくのか、あるいは地域社会にどのように貢献するのかという重要なテーマもあろうかと思えます。これも考えて知恵を出していく必要があると感じております。

委員

ぜひ聞いていただきたいなと思うのは、先ほど指摘がありました中と高の連携というか、一貫した形のものがないがゆえに実は今、非常に大きな問題が起こっているということです。世間から指摘されていることは、大学に何人入ったか、進学率が下がっているとか、センター試験の成績とか、いわゆる学力問題です。中学校では、ゆとり教育をおやりなんです、否定しているわけではありません。実はそういう子供たちが専門高校で非常に意味

を持って頑張っています。実はこの学力には2つあるのですが、そこをきちんと理解して議論を続けていかないと、中学校の教育を否定するような話になってしまいますし、そのままでいいかという課題があります。

また、魅力と活力ある高校づくりということ言えば、県立高校だけではなく、島根の高校はどうあるべきかということもあわせて考える必要があるのではないかと思います。

委員

私は3校の高校を視察しました。短時間でしたので、その学校や教育の10分の1、100分の1しか見えてない、そういう中での判断ですが、先生方、生徒も含めて学校の魅力を、魅力というよりも特色を出す、そういう努力をしているというところで感銘を受けました。

これから私どものこの委員会の仕事として重要な仕事があるわけですが、いずれ数を減らすということにも話が及ぶかと思いますが、地域の教育、経済、文化等の拠点としての高校の学級数、あるいは地域的にどこに配置すれば効果的かということ。また、魅力と活力あるというのは一体どういうことなのかということ。子供たちが生き生きと勉強している、それが魅力と活力なのか、あるいは見かけはそうでもないが、内で燃えているという中・高生の発達段階を考えると、思ってることや考えてることが全部外に現れるのではなくて、むしろ逆に深く潜行するというのでしょうか、そういうことも高校生にとっては一生懸命頑張ってる姿ではないか、そんな思いもあります。

魅力と活力ある高校教育について、先ほどからいろいろな意見が出ていますので、そういう面でどういうことを高校教育で、そのことがどういう人材の育成、いわゆる受験の学力だけでいいのか、もっと地域で貢献できる、地域に就職できるような、その辺りのことも検討したり議論できたらと思います。

議長

議題(4)その他ですが、事務局の方で何かありますか。

事務局

次回の開催日程ですが、事務局では11月17日の金曜日13時30分から16時30分ということで考えています。後日、確認したいと思いますので、よろしくお願いします。

議長

それでは、以上をもちまして、座長の役割を終えさせていただきたいと思います。

閉会挨拶（三浦教育監）

委員の皆様には、大変御多用の中を第2回の魅力と活力のある県立高校づくり検討委員会に御出席いただきましてありがとうございました。2時間半の長時間にわたりまして、集中して密度の濃い協議をいただきましてありがとうございました。

最近、私が本を読んだ中で、福地誠さんという人が「教育格差絶望社会」という本を書いておられまして、これが日本の特に都市部における教育状況を非常に的確にあらわしているような感じがいたします。経済力による格差、それから都市と地方における格差の中で、鳥根県の教育はどうあるべきかということを考えるヒントになるような感じがいたします。子供たちにとって、本当に魅力と活力のある県立高校づくりを平成21年から30年までの10年間で視野に入れて検討していただくこととなります。どうかよろしく願いしたいと思います。

それから、いろいろ要望とか資料提供をしてほしいという、あるいは質問等がございましたらいつでもよろしゅうございますのでしていただきますと、事務局としては大変喜びます。そのことによって密度の濃い協議を今後続けていけたらと思います。

きょうはお忙しいところ、まことにありがとうございました。

閉 会

事務局

では以上をもちまして閉会いたします。ありがとうございました。